美術館の裏側見せます

中高生にもなると美術館はあまり行く機会がない…という人も多いはず。そこで、堅苦しい、敷居が高いなどと思われがちな美術館を、今回は裏側から探ってきました！協力して下さったのは、目黒区美術館の学芸員、降旗千賀子さんです。目黒区美術館は一九八七年に目黒区民センターの一角にオープンした、地域に息づく身近な美術館です。

裏側って何？

さて、「美術館の裏側」と言われても、ピンときませんよね？ここでの意味は、「普段私たちが見たり、入ったりすることができない場所」です。今回は特別に、裏側へおじゃまさせて頂きました。

絵の収蔵庫・守る工夫

そもそも美術館は、それ自身が多くの作品を持っていて、目黒区美術館だけでも約三〇〇〇点は所有しているんだそうです。そんな多くの作品を収納する為のスペースも設けられていて、その部屋は収蔵庫と呼ばれています。

目黒区美術館の収蔵庫は約四〇〇㎡と五十五㎡の二部屋があります。普通、収蔵庫は一階か地下にあるそうなのですが、近くに目黒川があるため、万が一の事を考えて三階に作られたのだそうです。

収蔵庫内は、絵を守るために、二十四時間一定の湿度と温度に保たれています。

さらに火事が起きた場合、水を使うと作品にも被害が及ぶので、ハロゲン化物消火設備という装置を使って、貴重な作品を火災から守る、という対策が取られています。幸い、目黒区美術館ができてから今まで一度も、この装置が使われた事はありません。

しかし、いくらたくさんの作品を美術館が持っていても、その作品だけで展覧会を開く事はできません。なので、展覧会で展示したい作品は、他の美術館にお願いして、全国から借り集める事で、準備を整えているんだとか。

▲これがハロゲン化物消火設備のスイッチ

集められた作品は、一度収蔵庫へ運ばれます。その時に使われるのが、専用の巨大エレベーター!!なんと横幅3mの、一見部屋みたいなエレベーターは、一階で作品を運ぶトラックの駐車場と直結していて、届いたらすぐに三階の収蔵庫へと安全に運べるようになっています。このように、美術館では作品を守るため、様々な工夫をしています!!

では、美術館にはどんな人が働いているのでしょうか？どんな仕事をしているのでしょうか？

▲岡　鹿之助　「信号台」
1926年 油彩・キャンバス　45.7×53.2㎝
目黒区美術館蔵

▲作品運搬用のエレベーター

※他の美術館から貸し出し依頼が一番多い作品です！

▲たくさんの作品でいっぱいの収蔵庫

学芸員さんの仕事

展覧会の企画や準備を行ったり、作品を扱ったりするのは、学芸員さんのお仕事です。学芸員とは博物館や美術館に必ずいなければならない、文部科学省が所管する国家資格を取得した人の事です。美術館では、一般の人たちと美術を結ぶお仕事をしてくれています。主な仕事は展覧会の企画や準備で、美術の体験や講座なども担当しているそうです。

「学芸員」と聞くと、美術館で働いているんだから、作品を直したりするんじゃない？というイメージがあるかも知れませんが、実は間違い。作品が壊れてしまった場合は、修復研究所という所に依頼して、直してもらうそうです。作品の修理は、私たちが思っている以上に難しい事でした。

構想や準備期間を含め、一年以上前から展覧会の企画等に取りかからなければならず、とても大変な仕事ですが、新しい発見があるし、やりがいがあります。と降旗さんは楽しそうに話して下さいました。

▲所有している作品の資料がこんなに！

美術館を楽しむには

せっかく美術館に行っても、なんとなく見るだけじゃもったいない!!ということで、少しだけ美術館を楽しむコツを紹介します。

まずは額縁（がくぶち）。ずっと作品を見続けていると、目が疲れてきますよね？そんな時は、少し視点を変えて、額縁を見てみるといいかも。額縁は絵に合ったものが使われているので、一つ一つ違うんです。その違いを探すのも面白いのかもしれません!!

友達や家族と行った時なら、自分が一番好きな作品を見つけて、後で教えあったりする事もできます。こんな風に、何かきっかけがあれば心にも残りやすいはず。キレイなものだけが美術ではありません★

美術館からのお知らせ

現在、目黒区美術館では二月十一日～四月十一日まで、ベルナール・ビュフェ展が開催中です。同時開催のワークショップは、テーマが「木」。中高生が参加できるコースも開催しているので、この記事を読んで、少しでも興味を持ってくれたなら、ぜひ一度、友達を誘って美術館に来て下さい！

取材　もも・こと　text・photo　もも